



じぶんてき うちゅうろん

自分の宇宙論

火波

『それ』を知った日

す、と息をする。

空気中の窒素と酸素、その他諸々を吸い込んで。

ふ、と息をする。

肺や身体の中の窒素と二酸化炭素、その他諸々を吐き出して。

まだ何も知らなかった頃の僕が、今、頭の中に居座っている。

記憶という名の引き出しは、その少年のせいで開け放たれている。

そこからただこぼれるように流れ落ちてくる思い出。

ああ。あの時から、僕は少し変だった。

今だから解る、あの時の自分の無知。

あまりに浮世離れした思考回路をもっていた。

まだ、僕が僕としての自覚さえもってなかった時代。

この星どころか、この国の仕組みだって微塵も理解しなかった時代。

世界は、自分の見える地平線から先に存在なんてしていないと思っていた。

海も見えない町に生きていたせいかもしれないが。

山は、頂上から先は切り立っていて、そこが世界の終わり。

地平線は一度引かれたその線より向こうはない。

この小さな町が、世界の全てだと思った。

その年の夏。キャンプと称して車に乗って、その山の向こう側まで行った。

世界は、その山の頂上より先に広がっていることを知った日。

次の夏に海へ行き、水平線を見たときに悟った。

これこそが、世界の終わりなのだ。

一直線に引かれた空と海の境目は、どこかで交わっていて、そこが世界の終わりだと。

そうに信じて疑わなかった。

この小さな島が、世界の全てだと思った。

その年の秋。海の向こうから来た人が隣へ移り住んできた。
世界は、海の向こうにもまだ広がっていることを知った日。

その年の冬。地図を見て、この星は四角なのだと感じた。
だから、途中で切れている大陸も海も、そこで空に交わっているのだと信じた。
この四角い薄っぺらい世界が、自分たちの生きていける空間だと感じた。
驚きはした。でも、絶望はなかった。
だって、その途切れた先へ足を踏み出せば、僕はこの世界から逃げることができる。
もしかしたら誰も知らない世界へと行けるのかもしれない。と。
そんな風に思った。

次の年の春が来る前。親に聞かされて、この星は丸いのだと知った。
海は陸へ。陸は海へとしか、繋がっていないと知った日。

その時から、僕は球体の内側が世界だと思った。
この星は回っているのだそうだから、遠心力が働くならば、円の内側に居ないと飛ばされてしま
うから。
球体の内側に、山も海も川も空も星も月も太陽も。全てがあるのだと思っていた。
球体の外側には、ずっと大地が続くだけだと。そう思っていた。
あまり驚けなかった。でも、酷く絶望した。
この球体の内側からは、僕らは出ることができないと知って。
どんなにあがいても、これ以上の『外』が存在しないのだと思って。

その年の春。部屋に飾られた真新しい地球儀を見た。
人が、この『地球』という名の球体の、外側に立っていることを知った日。

ぼくの知ること

この星には、『重力』と『引力』があつて。

そんな存在のおかげで、僕らはこの星の上に足を付けていられるんだそうだ。

そんな存在のせいで、僕らはこの星より外へは出られないのだそうだ。

この星が四角だと思っていたときなんかよりも、ずっとずっと絶望した。

でも、この世界が球体の内側だと思った時よりも、ずっとずっと希望があつた。

その年の盆。この星の外の空のことを、『宇宙』と呼ぶことを知った。

そこには重力も引力もない代わりに、空気もないのだということを知った。

でも、僕はこの星の外へ出たかった。

外へ。外へ。ただひたすら、未知の世界を望んだ。

その年の晩秋。人は宇宙へ行けることを知った。

僕もがんばれば、この星から脱出できるかもしれないと。

初めて実感を持ってそう思えた。

どの授業のどんな話よりも、宇宙の話が楽しかった。

どのクラスのどんな子よりも、星の方が好きだった。

どの本のどんな言葉よりも、星の名前が心に残った。

僕はまだ、その先を望む。

宇宙には、僕らのすむ以外の星が、それはもう数えられないほどある。

肉眼で光って見える星は、僕らのいう『太陽』と同じものである。

つまり、自ら光を発している星しか、僕らには見えないということ。

けれど、光っている星なんかよりも、光らずにたださまよっている星の方がずっと多い。

そしてその中には、僕らと同じような『文明』を持つ命があるかもしれない。

そしてその太陽たちは、集合して『銀河』を作る。

僕らのすむ星も、『天の川銀河』と呼ばれる銀河の中にある。

銀河の中心は、もっともっと太陽のような星が集まっていて、眩しいらしい。

銀河は、渦巻きのように、また円盤のように広がっている。

そしてその銀河も、宇宙にはそこかしこに転がっているらしい。

星にも命があって、生まれればその後は確実に『死』に向かって歩くらしい。

でも、僕たちとは時間の感覚がまるで違う。

何十万年、何十億年、何十兆年と生きて死んでいく星のスケールは、最早もうよく解らない。

星の死は可憐で美しく、また大規模らしい。

太陽たちはその中心で『原子』だか『電子』だかを作ったり分解したり結合したりしているらしい。

その時のエネルギーが、熱や光になって存在するらしい。

中ではその作用がうまくバランスをとっていて、それなりに安定したエネルギーを出せるらしい。

でも、あるとき突然、そのバランスが崩れたなら。

そこから先は、急加速で死へと向かう。

それは太陽が大きければ大きいほど早い。

一気に収縮して、周りの物体を取り込んだりもするらしい。

その中心核では、『鉄』が生まれるんだとか。

僕らの太陽の、何十倍も大きな太陽が爆発したとき。

一瞬にしてすべてを吐き出し、その一瞬で、たまに『金』や『銀』、『ウラン』だかが作られる。

そして太陽は、たまにその死骸を残すらしい。

その死骸は、『ブラックホール』と呼ばれるものになったりもするらしい。

ブラックホールは、光さえも逃げられない早さで全てを吸収していく。

そして肉眼でそのブラックホールの姿を確認することができないので、見つけづららしい。

ブラックホールは、時も空間もゆがめてしまう摩訶不思議物体で、まだその実態は全て知られていない。

なにせ、この世の何よりも早い光をも飲み込んでしまうのだから。

こんな感じで、僕は知識を溜め込んでいった。

たまに『らしい』とか、『だとか』とか、曖昧なこともあるけど。

でも僕は楽しかった。

こんな風に自分が知識を溜め込めるなんて、夢にも思っていなかったから。

僕はいろいろな宇宙の話を受取り続けた。

どんどん覚えて、知って、学んで……。

でも、僕はまだ解らない。

まだ、知らないんだ。

宇宙が、どれだけ広いのか。

宇宙の先は、どうなっているのか。

僕の宇宙論は、まだまだ曖昧で、未完成なまなんだ。

いつか、全てを知る事ができたらいい。